

東北の人たちへの理解と支援

3月11日に地震、津波、そして原子力災害に見舞われた日本の東北地方は、私が日本に来て最初の5年間を過ごし、今なお日本での故郷と感じている場所です。東北は長らく、抑圧の標的にされてきました。私たちがこうした背景を理解することは大切なことだと思われます。それは、現在起きている事態を理解し、そこに住む人たちが地域社会の強さを維持しながら、古くからある抑圧構造を再び取り込むことなく、東北を復興させていくのを支えるためです。

現在、さまざまな「再建」構想が検討されています。この中には、原子力依存から代替エネルギーへの転換や東京から地方への権力移譲、そして住民が移住しなければならない場合でも地域のつながりを壊さず保持することに焦点を当てたものがあります。一方で、できるだけ早期のインフラ再建に力点を置き、それによって東京中心型の経済を下支えする役割を東北が再び担うようにするものがあります。

これから述べるのは、東北の抑圧についての私の個人的理解です。私は、10年前、5年間東北で過ごしたイギリス出身の白人女性です。過去数年にわたって、東北地域のアライになろうとしてきました。そして先週は、津波の被害を受けた人たちが自宅から所有物を搬出するのを手伝い、話も聞いてきました。

東北の内面化した抑圧

以下、私がみてきた東北の人たちの内面化した抑圧の一部を示します。これは、東北に住むコウ・カウンセラーへの支援をどう考えるかということに影響してくる事柄です。

- ・自分を重要な人であるとか大切な人である、と見なしていない
- ・あるがままの自分自身、自分の出自、自分の話し方を、恥ずかしいと感じている
- ・外部の人が、東北の文化を知り、理解し、気にかけることを期待していない
- ・よそから地域に入ってきた人たちを信頼するのに時間がかかる—「内」と「外」という区別が東北ではとりわけ強固である
- ・村八分にされないように同化・同調を求める圧力。たとえば、自分自身の考えを信じるのが許されないこと、外部から規定された政策に応じなければいけないこと
- ・愚かであるとか無知であるとか感じている
- ・自分を犠牲にするまで他人の世話をする、とりわけ女性（先週、私たちが働いた家のすべての人たちが、所持品のほとんどを失ったにもかかわらず手伝いの私たちに飲み物やお菓子を提供した）

・禁欲主義、運命主義

階級主義と地方の抑圧

東北の抑圧は主に階級主義と地方の抑圧に根ざしているように見えます。東北は日本本州の北に位置し、かつては京都そして現在は東京という政治の中心から遠く離れています。地理的隔たり、山脈、そして雪が降り積もる冬期のため、比較的孤立した地域でした。現在では交通機関が発達していますが、東北を一度も訪れたことがない人が東京には数多くいます。東北は今でも本州で最も貧しく（日本国内では、東北より貧しい地域は沖縄だけです）、そして圧倒的に労働者階級が多い地域です。私は、英国で最も上流階級が多い地域の一つであるケンブリッジから、東北地方の北に位置する青森の漁港に引っ越してきました。私が経験した「カルチャーショック」が、外国に来たからという点と同じくらいに階級制度と深く関連があったことが理解できたのは、後に再評価カウンセリングを始めてからでした。

20世紀の中頃まで、東北出身の男性は冬期に家族を残し東京に出稼ぎに行かなければなりませんでした。数ヶ月にわたって農業ができなかったからです。東京で彼らは、教養のない田舎者として見なされ、差別されました。未婚の若い女性は工場で働くため南の地域に送られるか、農業従事者や売春婦として日本の植民地での強制労働に売られていきました。こうした事が極めて一般的に行われていたため、地方政府はすべての女性の強制労働者が少なくとも「適切な」契約書を作成したかを確認する事務所を設置していました。一方、多くの若い男性が軍人になりました。

現在、農家や漁師になりたがる若い人たちはほとんどいません。東北でこれ以外の仕事を見つけるのは難しいために、若い人の多くが東北を離れていきます。海外のメディア報道では明らかではありませんが、津波犠牲者のほとんどがかなりの高齢者で、これは東北地方の人口形態を反映しています。

東北の人たちが南に行っても、いい仕事はほとんどありません。数年前の事件ですが、非正規雇用の臨時職員として自動車工場で働いていた東北出身男性が解雇を宣告され、住んでいた会社の寮を強制退去させられることになり、東京の秋葉原で数名の通行人を殺害しました。この事件がきっかけとなって、まともな事前通告もなく解雇され得る非正規雇用者の状況が、少なくともしばらくは論議を呼びました。しかし、多くの東北出身の若い人たちがなぜ低賃金で不安定な職に就いているのか、という理由について議論していた人を私は覚えていません。

農業や漁業に従事して東北に残っても、生計を立てていくのは難しいことです。食の輸入自由化のため、今あるほとんどの食物が中国やその他のアジア各国から入ってきます。日本の農家がそれほど安く食物を育てるのは不可能です。数年前、価格の暴落によって青森のリンゴ農家のなかで自殺者が相

次ぎましたが、メディアはこれを報道しませんでした。私は現地に住む友人からこの事実を聞きました。自殺は主に大都市に住むサラリーマンに関わる問題であるというイメージがありますが、最近の経済危機が起きるまでは、最も高い自殺率を示していた県は、すべて東北地方にあったのです。

経済的抑圧によって、使用済み核燃料再処理施設はもとより日本の原子力発電所の数カ所が東北に置かれています。地方政府はお金が欲しく、住民は仕事が必要で、このため原子力発電所を受け入れる強い圧力が働きます。私は使用済み核燃料再処理施設の近くに住んでいましたが、私の近所でそれに反対する声を聞いたことがありませんでした。政府に対する一般的感情は、「しかたない」という運命主義ですが、東北ではとくに根強いでしょう。その東北では、人は権力者が彼らの言うことを気にかけてくれるだろうという期待を一切持っていないのです。東北の原子力発電所が停止し、東京の電力不足が広く論議され、多くの人たちが省エネについて考えています。しかし、東京に電力を供給するために、なぜ東北の人たちが原子力発電所の近くで居住しなければいけないのか、について疑問を投げかける人の声を私は聞いたことがありません。

文化的・言語的抑圧

東北は東京から遠く離れ、また東北圏域内での行き来も地理的事情から困難さがあったため、東北にはたくさんの方言が存在します。しかし、メディアや移住や標準語教育のため（19世紀末の明治時代は標準語、いわば東京の日本語、の導入が厳しく徹底された）、方言色は薄まってきています。東北の人たちが移住していった場合、その話し方のせいでからかわれてきました。数年前、人気のあるお笑い番組の中で、東京に来て東京人のように話そうとする青森出身の若い男性が、物笑いの種にされていました。数ヶ月前、東北エリア¹を対象にした言語解放の集まりに参加しました。この集まりの中で、東北エリアの地域紹介者であるひろびい²は、参加者一人ひとりが持ち回り形式で、それぞれの方言で一分間話す時間を設定しました。しかし、ほとんどの参加者にはそれができませんでした。彼らはあまりにも恥ずかしく感じたか、あるいはもう方言を思い出せないと感じたのです。参加した人たちは、「標準的な日本語」を正しく話せないし、方言も正しく話せない、と感じていました。

同様に、日本文化として見なされているものは基本的に、京都宮廷の文化や伝統です。日本の画や詩や庭園の中核を成す要素である簡素さや質素さは、東北のような田舎での生活を、上流階級の貴族の視点からとらえて、理想化したものです。先週宮城県で聞いたラジオ番組で、東北の恋愛歌がすべてどれほど労働と絡んでいるか、についての興味深い言及がありました。たとえば歌の背景は、俳句を書こうと茶室に座する貴族のではなく、港に帰り恋人に会える日を待ちわびる漁師です。東北に来

¹ エリアとは、再評価カウンセリングの各地域のことです。

² さとう ひろし

た当初、私が心に描いていた寺社・仏閣や庭園のある日本のイメージがそこにはなく、がっかりしました。たいいていの場合、それをつくる十分な資金がなかったのです。東北の伝統は、興味深くそして珍しいものと受けとめられています、それはあくまでも低く位置づけられる「庶民文化」の範疇においてです。このため、東北の人たちがその文化を誇りに思うのは難しいことなのです。

「ここでなくて本当に良かった」

東京の人たちは今、東北を思いやり、東北の人たちを支援したいと思っていますが、東京に住む私たちの多くが、内心では「東北で起こったことはひどかったが、ここ東京でなくて本当に良かった」と思っただろうと私は思っています。海外でも何かしら同じような表現がされていたのを覚えています。東京で同レベルの被害があった場合、より甚大な経済的影響があったでしょう。よって、被害は「もっと悪く」なっていました。暗黙ではありますが、東北の人たちはもちろん分かっています。東京都知事の石原慎太郎が、東京にはあまり被害を及ぼさなかった一方で東北では多くの人命を奪った出来事を、「天罰だ」と公的に発言したにも関わらず、この災害の一ヶ月後に都知事に再選を果たしたという事実が、多くを物語っています。

人種差別と集団虐殺

これまで、しかも RC コミュニティー内でさえ、言及されたことを聞いたことがない点ですが、人種差別と集団虐殺は、おそらく東北の抑圧の要因であるだろうと私は思っています。つい最近まで、東北には相当数のアイヌ民族³が住んでいました。アイヌ以外の異民族もいました。これらの民族についてはさらに、私も他の人と同様に、ほとんど伝えられていません。青森のコウ・カウンセラーの一人は、彼女の父親が子どもだった頃、20世紀の中頃には彼はアイヌの人たちを知っていた、と話していました。東北の多くの地名がアイヌ語ですが、日本語表記になっているため、人が必ずしもこれを認識しているという訳ではありません。私が住んでいた地域の地名もアイヌ語で、それが理由で地名が「奇妙なもの」になっているのです、と言われました。しかし、私も私に伝えてくれた日本人のどちらも、このことが何を意味するのかを考えませんでした。東北がとくに荒れ果てた未開の土地として見られる理由の一つに、アイヌの存在がある、と私は思います。東北のコウ・カウンセラーの中には、認識はなくともアイヌを祖先に持つ人がいるでしょう。東北のコウ・カウンセラーに起こっていることを見ると、そのうちのある部分は、内面化した集団虐殺ではないだろうかと最近考えています。集団虐殺が東北の歴史の一部にあるとしたら、そこに住む人たちが自身の身の安全と健康を守る対策を真剣に考えることが難しいと感じるもう一つの理由であり得えます。

³ アイヌ民族は日本の先住民族です。

保守的な地域

東北は日本の中でも保守的な地域の一つです。これには様々な肯定的側面もあります。地域のつながりが強いことです。互いを知り互いを助けます。今回の災害では、近所の人たちや地元町内会などの自治組織が巡回して警報を伝え、避難を手助けしたことによって、津波が到達する前に多くの人が避難しました。その後は、近隣の高齢者宅へ炊き出しする体制を整えました。こうしたやり方は東京ではないでしょう。先週、私が働いた地域の住民は、土壌に残された塩分により土地が農業に利用できなくなったために移転を余儀なくされる状況ですが、地域住民が集団で移転できるように地元行政と交渉しています。

保守的な環境で暮らしていく上での厳しい面もあります。周りに合わせるプレッシャーが強いです。多くの津波被害者が暮らす避難所では、これがなおさらに強くなっています。全員が同じでなければならないのです。同じ時刻に起床し、同じ食事をとり、同じことをする。ある一人の女性は、恩返しをするために彼女が滞在している中学校のグラウンドの雑草とりをしたかったのですが、他の住民に気付かれ噂話をされたくなかったのもみんなのためにもなるこのことさえ、非常に秘密裏にしなければならなかったことを私に話しました。また彼女は、夫に仕事があることが原因で周りにねたまれ、彼が入り口玄関の席に座る役割当番を引き受けなければ、二人とも避難所を去るべきだと言われたことも私に話しました（彼女が代わりにその当番をすることは受け入れてもらえないことでした。性差別は東北では非常にあからさまです）。多くの人が、他の人は自分よりももっと苦しんでいるのだから不平・不満を言うてはいけない、と感じています。我慢しなければいけない、前に進まなければいけない、というプレッシャーのせいで、避難所の住民にとっては、感情を外に出すのは難しいことです。現在多くの人が、2階の数部屋でしか生活できないとしても、一部損傷している自宅に戻ろうとしています。空間の狭さやプライバシーが確保できない避難所と比べると、それでもまだまだだからです。

東北の人たちを支援する

一連の災害から東北の人たちが立ち直るためにどんな支援ができるかについて、私は考えています。もちろん、彼らの話を聞く必要がありますが、これをどうやっていけばいいか悩んでいます。直接的な被害を受けた人たちは現時点ではまだ、目の前にある実務的な課題をこなすのに手いっぱいです。行政当局も同じ状況です。厳しい状況の下で生活しています。ほとんどの場合、自分について話したり、感情について語ったりする十分なゆとりや余裕がありません。さらに、よそ者を信頼することに慣れていません。これまでのところ、私が見つけた最良の方法は、現地に入り、彼らの側で働き、彼らが話したいときに耳を傾けることです。

災害から生き延びた一人の女性は、精神的に辛くなってくるのはこれからだろう、と私に話してくれま

した。当面の課題をこなし終え、職や生活基盤のないまま取り残され、小さな仮設住宅への転居時に多世代同居世帯が分断されるようになってから後だ、と言うのです。

東北では長期にわたるつながりがとても重要なので、現地の人たちと一緒に働きたいという人は長期的にかかわる必要があります。外部から入ってくる私たちの多くは、どのように支援したいかについて自分なりの想定や考え方を持っていますが、これは役に立ちません。なぜなら、それは東北の内面化した抑圧を強化するだけだからです。

東北の人たちが直面している問題に関心を寄せ、それについて考え、彼らと一緒に取りくみ続ける姿勢も示しながら、彼らが自らの解決策を考えられるような支援の仕方を見つけ出すのが、私にとって目下進行中の挑戦課題です。

エマ・パーカー

日本、東京

翻訳 志堅原 郁子